

ハウレンソウの露地栽培

JAグループ和歌山農業振興センター 技術参与 本田 孝志

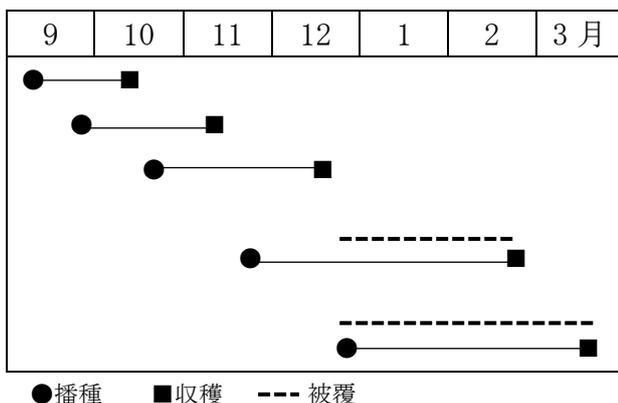
【はじめに】

ハウレンソウはヒユ科の一年草で、原産地は中央アジアです。生育適温は15～20℃で比較的低温を好みます。播種から収穫までの期間が短く、栽培しやすい品目です。ここでは、市場や直売所などで人気の高いハウレンソウの栽培について、簡単に紹介します。

【品種・作型】

ハウレンソウには葉の切れ込みの深い和種と比較的丸葉の西洋種があります。近年は生育の旺盛な西洋種が主力となっています。西洋種の代表的な品種として、10月～11月収穫では「ミラージュ」、12月～3月収穫では「アレグレット」などがあります。どちらの品種も生産性が優れ、べと病などの病気に強い品種です。気温の高い9月に播種すると、10月中旬に収穫でき、生育期間は40日程度です。冬の低温期は生育が遅くなり収穫まで80日程度かかります。12月中旬以降は低温害を防止するため、パオパオなどの資材でべたがけするなどの対策を行います。

秋冬ハウレンソウの主な作型



【播種・栽培管理】

排水性の良い圃場で栽培することがポイントです。ハウレンソウは酸性土壌を嫌うので、セルカなどの石灰資材を施用し、土壌pHを6.5程度に調整します。さらに、基肥を散布した後、うね幅120～140cmに畝立てを行います。降雨によって畝の上面に水がたまると発芽不良になるので、水がたまらないように丁寧に畝立て作業をします。

種子は1アール当たり3～4dl準備します。

条間15cm程度で4条にすじまきを行い、種がしっかりと隠れる程度に覆土を行います。

播種後は適度にかん水を行います。さらに、ハウレンソウに登録のある除草剤「ラッソー乳剤」を散布すると、イネ科雑草の発生を抑制することができます。発芽までパオパオなどで畝を被覆しておくことで土壌水分が適度に保たれて発芽がそろいます。

気温によりますが、播種後7日～10日で発芽してきます。株が込み合っている場合は本葉2～3枚になった頃、株間5cm程度に間引きを行い、株がしっかりと大きくなるようにします。



間引き適期のハウレンソウ

【肥料】

肥料は 10 アール当たりの窒素分量で 25kg 程度必要です。基肥を施用したあと、本葉 3 枚になった頃、条間に追肥を行います。その後は生育を見ながら、葉色が淡くなったら液肥を施用して、生育を良好に保つようにします。

施肥の一例

基肥	エコレット 266(12:6:6)	120kg
	苦土入りセルカ	120kg
追肥	エコレット 266(12:6:6)	80kg

※生育後半に葉色が淡い場合は液肥を施用

【病害虫防除】

秋から冬の低温期はホウレンソウの生育に適した時期であり、病害虫の発生は比較疫少ない時期ですが、気象条件によっては病害中が発生するので、早期防除に努めてください。

○立枯病

9 月の気温が高い時期に播種すると立ち枯れ病が多発することがあります。土壌伝染性の病気で、発病後は防除することが困難です。ハウス栽培では土壌消毒を行って発病を予防します。露地栽培では、連作を避けるとともに、播種時期を少し遅らせると発病が抑制されます。

土壌消毒剤 (回数)
 クロルピクリン 2~3ml/1 穴 (1)



○べと病

気温が 10℃前後で雨の多い場合に発生が多くなります。葉に淡茶色の斑点が発生し、病気が進むと株全体が枯死します。よく見ると葉の表面にカビが発生しています。早期防除により病気が広がらないように注意します。

【主な防除薬剤】 (日/回数)
 ランマンフロアブル 2000 倍 (3/3)
 アリエッティ水和剤 1500 倍(前日/2)



○ハスモンヨトウ

9 月~10 月にかけて気温の高い時期に被害が多くなります。雌成虫の蛾はホウレンソウの葉裏に 400 個程度の卵塊を産卵し、小さい幼虫は集団で生息しています。食害された葉は白く網状になり商品価値がなくなります。早期防除が重要です。

(日/回数)
 プレバソンフロアブル 5 2000 倍(前日/3)
 アファーム乳剤 2000 倍(3/2)

【収穫】

草丈が 25cm 程度になった頃に収穫を行います。秋や春の気温が高い時期は生育が早いので、収穫遅れにならないように注意して下さい。収穫後は温度の低い場所で保管し、品質の良いホウレンソウを出荷販売するよう努めて下さい。